

ケショウヤナギの新しい分布地 一穂高町中房川の上流一

横内 文人

Yokouchi, F.: New distribution of *Chosenia arbutifolia*

1. はじめに

ケショウヤナギ *Chosenia arbutifolia* A.Skav. は、隔離分布の代表樹種としてあまりに有名である。即ちその国内分布地は、北海道(十勝・日高)、本州(長野県)のみである。国外では樺太、カムチャツカ、シベリア、朝鮮である。このように日本海を大きく隔てて隔離分布する植物群は、『飛び越し型分布 Over Sea of Japan type』(前川1964)と言われる。長野県では、上高地とその同水系である梓川下流域に主として分布している。梓川下流域のケショウヤナギについては、報告したことがある(横内文人 1975)。

1991年には、大町市竈川の分布が報じられ、新分布地として注目を集めた。また梓川村八景山・同松香寮前、波田町鍋割の群落の存在も報じられた(山崎1992)。なお高瀬川(穂高町池田町境)にも1本生育している。

筆者も今回、新しく南安曇郡穂高町中房川でケショウヤナギの分布を知ったので報告する。なお本報告にあたり、種子植物標本の一部は、神奈川県立博物館の高橋秀男氏に同定していただきました。厚く御礼申し上げます。

2. 中房川のケショウヤナギ

中房川は、北アルプス大天井岳(2922.1m)一燕岳(2762.9m)一有明山(2268.3m)等によって囲まれる水域をほぼ東へ流れている。5万分の1地形図で「檜ヶ岳(右下)」・「信濃池田(左下)」に属し、穂高川一犀川へと流れ下る。中房川は、急流である。宮城(700m)から中房温泉(1462m)の約12kmの間に7つの発電所を設けていることでもわかる。急流であるがために各所に堰堤が造られて土砂の流出を防いでいる。堰

堤は流下する土石でやがて満杯となって、ほぼ平坦な河床を出現させる。このような立地が、ケショウヤナギの生育地なのである。

周辺はコメツガを主とする亜高山帯針葉樹林である。一部にヒノキ、クロベ等を交えている。またオオイタドリやチョウジギク等の裏日本型分布の植物も見られる。河原の安定地にはオノエヤナギ群落が成立している。

中房温泉(1462m)は、燕岳登山の出発地点である。この温泉の上下に渡ってケショウヤナギが点々と分布している。筆者がこの存在に気付いたのは、長兄・正之とともに調査に入山した1992年8月11日である。



図1. 中房川のケショウヤナギ

中房川でのケショウヤナギの分布は、全く知られていなかった(横内斎1962、1968)ので、念のため神奈川県立博物館の高橋秀男氏に同定を願った。同氏から間違いないとのお返事を戴いたので、その調査を開始した。中房川で発見したケショウヤナギは、全部で69本であるが、今回その一部について報告する。なお証拠標本は、信州大学標本庫に入れてある(F. Yokouchi No.2560, 南安曇郡穂高町中房川、標高1550m、1992年8月11日、SHIN)。

3. 中房川のケショウヤナギ分布地と環境

中房川のケショウヤナギの調査は、分布図を作成し、樹高、根周り、標高、斜面の方角・角度、河床の厚さ、生育位置、植生等を記録した。中房川で確認したケショウヤナギの生育場所と本数は、次の通りである。

- ① 国民宿舎有明荘近くの河原……………2本
- ② 合戦沢(中房川支流)一合戦橋の上流側…17本

下流側…15本

- ③ 白滝の湯前の河原……………15本
- ④ 木橋下の河原……………18本
- ⑤ 1600m上の河原……………2本

以上 69本

4. 結果の考察

1、岸一川の流れに対して右岸12本、左岸4本であった。全体では右岸65本、左岸4本であった。支流の合戦沢も中房川の右岸とした。右岸が圧倒的に多いが、これはケショウヤナギの生育地がたまたま登山道に近いことによるものと思われる。登山道と河原が標高的に大きく離れている場合には調査が不可能であった。よってこの他の河原にもケショウヤナギが生育している可能性は充分にある。①・③・④・⑤の生育地はいずれも堰堤によってできた河原である。未だ高木または亜高木の森林の成立を許さない開放的な幅広い河床に見られる。このような環

表1. 中房川のケショウヤナギの分布環境

No.	岸	樹高 (m)	根周り (cm)	標高 (m)	斜面 方角 角度 (°)	河床 厚さ 位置 (m)	川面 より (m)	年齢
1	右	1.05	4.0	1545	SW 25	0.7 下	1.0	4
2	"	0.83	4.8	1545	NE 10	0.5 中	1.0	4
3	"	1.83	5.7	1545	E 20	0.5 下	1.0	6
4	"	1.25	7.9	1545	SE 10	0.3 中	1.0	6
5	"	1.01	2.9	1545	NE 10	0.6 上	0.5	4
6	"	1.79	6.9	1545	SW 15	0.7 中	1.5	6
7	"	2.05	7.6	1550	SSE 10	0.4 上	0.4	6
8	"	1.65	6.3	1550	SEE 20	1.5 下	0.5	6
9	"	1.97	8.3	1550	E 30	2.0 下	0.1	6
10	左	2.21	9.1	1555	S 25	1.2 中	2.5	7
11	"	2.51	12.1	1600	S 20	1.0 中	1.2	9
12	"	3.50	21.5	1630	N 10	1.0 上	1.2	10
13	右	1.19	7.9	1480	NE 10	1.5 中	1.5	7
14	"	2.23	11.8	1305	SE 15	0.4 中	1.5	7
15	左	1.23	8.7	1310	WSW 15	1.0 上	4.0	4
16	右	1.70	9.0	1480	NW 20	0.7 上	2.0	8

境がケショウヤナギの発芽・生育に好条件なのであろう。

2、樹高—0.83~3.50mの間にある。いずれも若木である。最大は4.5m近いものもあった。

3、根周り—2.9~21.5cmの間にある。

4、標高—1300~1630mの間に分布している。中房温泉(1462m)より上部が67本である。この標高はケショウヤナギの多い上高地(河童橋1500m)によく似ている。

5、斜面の方角—北1、北東3、東2、東南東1、南東2、南2、南西2、西南西2、北西1で特定できる方角はなかった。

6、斜面の角度—10~30°の範囲にある。これより急になる斜面は殆ど成立していない。平坦面でのケショウヤナギは1本もなかった。多少の傾斜角

が必要なことが分かる。

7、河床の厚さ—0.3~2.0mの間にある。河床の厚さはあまり関係ない。

8、河床での位置—河床斜面を上、中、下の3段階に分けてケショウヤナギの生育地をまとめると上位5、中位7、下位4であった。斜面の位置にはあまり関係ない。

9、川面よりの高さ—現在の流水面とケショウヤナギの位置関係をみた。0.1~2.0mの間にある。あまり関係ない。

10、年齢—幹にできる年枝跡で調べてみた。はっきりと分からない部分もあったり、また明らかに生長してから土砂に埋もれた部分があったりしている。しかし一応の参考になるものと思われる。4年4本、6年6本、7年3本、8年1本、9年1本、10年1本であった。中房川へは4~10年位前にかけてケショウヤナギの種子の散布があったものと考えられる。

11、周辺の植物—ヨモギ(出現回数16)、ヒメノガリヤス(15)、オノエヤナギ(14)、カラムツ(12)、ミヤマヤシャブシ(10)、ヤマハハコ(8)、コウゾリナ(7)、ウダイカンバ(6)、ヨツバヒヨドリ(6)、イタドリ(4)、ススキ(4)。

以下3、ホッスガヤ、ダケカンバ、ヤハズハンノキ、コメツガ。

以下2、カワラハハコ、カワラハンノキ、ゴマナ、ノリクラアザミ、アキノキリンソウ、クサボタン、ノコンギク、トダシバ。

以下1、ハクサンオミナエシ、モミジイチゴ、フキ、

イヌコリヤナギ、ウラジロモミ、ヤマホタルブクロ、ミズナラ、ニシキウツギ。

今後オノエヤナギ、カラムツ、ウダイカンバ、ダケカンバ、コメツガ等の高木になる植物との競争がどうなるのか興味深い。現在はケショウヤナギの方が生長よく、他の植物より樹高は高い。

5. まとめ

以上、中房川のケショウヤナギの分布地、分布概況、植生等の調査結果について考察を加えた。中房川のケショウヤナギの分布は、全く新しい分布地であり、今後の生長に興味がある。

最後に考えなければならないのは、ケショウヤナギの種子の供給先である。上高地からか、あるいは梓川下流の地籍なのか。現在のところ筆者は証明する手段を持っていない。

6. 参考文献

前川文夫 1964. 新旧二つのとびこえ型分布
植研 39:61

山崎林治 1992. 本州におけるケショウヤナギ
23pp.

横内 斎 1962. 中房温泉付近の植物 長野林
友 4:69~73 長野営林局

1968. 燕—中房植物目録 中房・燕
岳p.59~71 穂高総合印刷所

横内文人 1975. 梓川下流におけるケショウヤ
ナギ 長野植研誌8:30~35 長野県植物研
究会